

星の友を失う

五味一明・箕輪敏行

青木正博君は近頃なんだか元気がなく活動的な所がなく、医師の診断では鬱病だとのことであった。

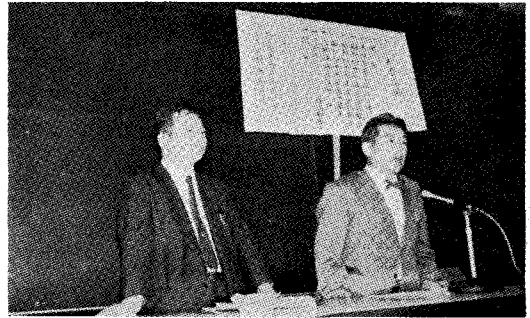
7月29日20時頃、突然に、地元・中央などの諸新聞社から私のところに、青木君が富士見で何かの事故でなくなったが知っているかとの問合せの電話が来た。万一そんなことであれば勿論知らせがあるが知りませんと否定の返事をした。私としても青木家に問い合わせも出来ずにいやな苦しい夜を明かした。翌早朝になって嗣子^{つよし}巍氏からの電話で「昨夜、父が富士見で亡くなった」と知らされた。

おもえば7月28日の夕刻に『いま、カアチャンがコーヒーを持ってくるで』と強引に引き止められたが、人一倍の淋しがり屋だと思っ私は家へ帰った。あの引き止めの声が最後の別れの言葉であった。

君とのつき合いは二人の生涯にとって、決して短かい時間ではなかった。君は本当に多忙過ぎる人であり、そして大勢の人達との交りがあった。医師会、自然保護協会、天文関係等よくあれだけの人達と交り、どの会合に出ても必ず責任ある位置におかれて来た。決して妥協してその位置を得る様な人間ではなかった。必ず自己の所信の基に推される君であった。惜いことに交友関係や知人の多くが『事』あるたびに相談、または意見を聞いた人であったが、最後の決定には自分の意志で決行する人であった。この一事が——、一番私達には残念であった。

君ほど“私の小さい天文台”を欲しがって星と交ることにあこがれを持っていた人を私は知らない。我々はせいぜい望遠鏡が欲しい位で終るのだが、君はそうではなかった。仙台におられる頃に何年かかったか吉田正太郎、小坂由須人氏を援けて今日の仙台天文台の基礎を作り、また諏訪に帰ってからは人工衛星の観測所を作り、あれだけの観測を成功させ得た。これらはすべて君の大活躍によったものであった。だがその君は今はいない。富士見に天文台を作ってから知人、各学校、団体等の講演会に請われるたびによく出かけて映画、スライド等を使って天文学の普及につとめた。日食にも内外とはず家族や子供をつれて出かけ、そのたび晴天にめぐまれて家の人達を喜ばせていた。

自然保護運動では『おれは医師であるから、一生懸命にやる』とゆうてピーナスライン、南アルプス林道の反対運動を一人で背負込んだ様な形で大分精力をつかった。また、日本の星空を守る会の幹部としてよく活動を



1972年5月24日、日本天文学会総会の席上、光害規制運動をよびかける青木正博氏(右)と箕輪敏行氏。

してくれた。がもう君はいない——。

君は我々星仲間の巨星的な存在であった。そして君の生命の燃焼は実に見事であった。そして我々の視野から突然と消えてしまった。

さあ青木君！今度はゆっくりと宇宙の星々を見物しながら、好きなコーヒーを飲み、煙草でもすいながら、悠々とした君独得のあゆみを続けて大宇宙のパノラマを見物をして下さい。ゆっくりとゆっくりと——。

我々も君がいなくても星見はするから——。

実は君がいなければ淋しいのだが——。

青木君。左様なら。

(五味一明)

逝く秋や君を偲べば風冷ゆる

大火は西に傾かんとす

(みのわとしゆき)

見上ぐれば銀河かすかに星冴ゆる

この星空を守りし君はも